

# 稲作だより

第11号

令和6年10月31日発行  
やまがた温暖化対応米づくり  
日本一運動村山地域本部  
西村山農業技術普及課  
TEL : 0237-86-8287

## 11月も高温で経過する見込み！ 秋耕を行い、稲わらの腐熟を促進させましょう！

### 稲わらの施用効果

- ・稲わらを施用すると、土壌中の養分量が高まります。また、土壌が柔らかくなり、孔隙率が高まるため、水分や空気を保持する機能が高まります。

表1 稲わらで土壌に還元される養分量 (kg/10a)

窒素	リン酸	カリ	石灰	苦土	鉄	ケイ酸
4	2	14	3	2	1	60

※稲わら由来のケイ酸の利用率は約10~20%

表2 稲わら施用による土壌物理性の変化

	孔隙率 (%)	貫入抵抗値(10cm)
稲わら施用	7.2	8~9
無施用	6.5	1.3~1.4

### 秋浅耕で稲わらの腐熟促進

- ・稲わらは気温が10℃以下になると分解が進まなくなります。稲刈り後はできるだけ早い時期に**5cm程度の浅耕**を行い、腐熟促進を図りましょう。
- ・石灰窒素や発酵鶏ふんの秋施用で、稲わらの腐熟が促進されます。ただし、石灰窒素は、玄米粗タンパク質含有率が高まる場合があるので、連年の施用や、地力の高い圃場での使用には注意が必要です。
- ・つや姫の場合、石灰窒素の投入量は10kg/10aを上限とし、必ず基肥の減肥を行いましょう。(地力高、全量基肥栽培の場合、石灰窒素施用は控える)

### 稲わらの分解が遅れると、、、

- ・春に稲わらの分解が急激に行われることで、土壌還元(ワキ)が進み、根が伸びにくくなることで、稲の初期生育が抑制されます。

LINE を活用した情報提供を行っています。

QRコードを読み取り登録の上、ぜひご活用ください！

